

観 測 案 内 (8月)

木 邊 生

“8月”8日には秋が立つ。起源は別とて、黄緯は立夏と既に等しい。然し事實は暦の上だけの事であつて、此の月一杯は暑苦しい。海水浴、登山、野球と話題を追ふのも悪いとは云はぬが、炒る様な炎熱の下に、我等の糧を育てて呉れる農民や、むせる熱氣と騒音の中に働く工場勞務者等個々の値は別として、數の Value の前に、一滴の汗は贅澤だらうと考へられる。

天候、シイイング 大陸だと、それでも月末には秋風も立つが、海に囲まれた内地は未だ未だである。そろそろ颱風氏の來訪を注意せねばならない季節に入るが、迷走でない限り、未だ内地へ上陸する事は尠ない。平均して北支方面の氣壓がそろそろ上昇する頃に、内地へ募進する機會が多くなるが、先づ9月に入つてからだ。氣壓配置は7月來に準じて居り、天候もほぼ似通つた場合が通例である。都合よく行くと、内地全體平均して1年中で最もよく晴れる場合もあるが、狂ふ時もある。シイイングも、7月末と同様だと心得て居ればよい。

太陽 晴れが続くと1ヶ月25日以上 of 觀測が出来る。朝方に狙へば氣持よく觀測出来る筈である。

遊星面 火星は益々小さく $12''.6-10''.3$ まで視直徑が減少する。今シーズン of 觀測も8月で終る。ずつと北半球を主として向けて居た火星も、8月に入ると次第に中央緯度が減少して、春の深くなつて行く南半球を10ヶ年振りに見せる様になる。此の邊が狙ひ所だらう。**木星**は愈々巨光を東天に放つて、4個 of 從者の光も又可愛い。衛星については屢々書かれてあるが、10cm200×で圓盤像が辛じて見える。15cm になると普通の目でも250×使用すれば見える。但し1個1個見て居ては本當に見えてゐるのかどうか解らないから、各個の大きさを比較して見ると、第3衛が大きい事によつて氣付き易いのである。パナード等の見た衛星面上の模様は、残念乍らも30cm級でも見た事がない。**土星**や**金星**は曉天のものだが、スガスガしい夏の朝の空氣を呼吸する意味でも、見甲斐はあらう。

恒星界 間に包まれると共に、夏の代表が、天の川と共に北から南へ列なつて居る。前號に變光星の巢窟だと云つたが、今假りにベルリン、バベルスバ1グ天文臺版の1937年度 Schneller カタログに依つて、總記載數6968個をば、星座別に見ると、射手534、蛇遣ひ461、白鳥391、さそり386、センチウルス381、鷲352が Best six である。皆夏の銀河に浸つて居る。小さな星座でも、琴174、南冠141、小弧94等と相當な數を示して居るが、反對に冬の銀河ではオリオン185、駁者90、一角獸92、双子87と餘程少ない。夫れが銀河に遠い星座と來ると、大熊38、獅子35、鯨23等廣い星座でも、此の程度である。勿論未発見のものはいくらでもあろうし、星座と云ふ意味の乏しい區劃を標準にして居る不備はあるが、具體的な觀念を産み出すのに好例だろう。口繪の銀河寫眞は Tessar 4.5 で100分の露出で得たものである。原板からでは淡くて仕方が無いが、プロセス乾板で Copy を2度通すと相當美しくなる。畫面の廣角が狙ひ所だつた。原板には Iso-pan を Filter 無しで使用したが、やはり赤い星が小さくなる事は免れない。其上結局スピードは普通乾板よりも汎色性を附する操作の爲に落ちるそうであるから、決して得策でないらしい。

其他の天體 對衝に來る明るい小遊星では第一番 Ceres ある。

對衝は21日であるが、あまり近くはない。光度は7.8である。位置は

日付	赤 經 $^{\text{h}} \quad ^{\text{m}}$	赤 緯	
7月30日	22 15.6	-25° 17'	視直徑は約1秒角であるから
8 7	9.8	-26 13	木星の衛星より小さい。丁度
15	3.2	-27 5	對衝の頃には、南魚座の北部
23	21 56.2	-27 48	に居る。かなり黃道から離れ
31	49.3	-28 21	て居る。小望遠で根氣よく狙
9 8	43.1	-28 43	ふのも面白からう。

其他 (172) Baucis 9.6 が8月18日に對對となる。赤經 $21^{\text{h}}40^{\text{m}}$ 赤緯は -16° の邊に居る。

8月中旬のペルセウス流星は 消長が少ないから、今年も例年通り見られるだろう。又7等級の 1937f 彗星が7月上旬に発見された。未だ充分解つて居ないが、逃げ足は鈍い方だから8月の方が位置は見易くなる。

昨年	6 ^h	14 ^h	21 ^h	
雲量	6.6	8.2	6.7	太陽黒點相對數 59.0
氣溫	+23.3°C	+30.0°C	+24.8°C	観 測 日 數 22 ^d